

婦人の地位の向上が叫ばれておりますが、女性が管理職となるのは大変なことです。

まず、同性からも異性からも注目されます。それでなくても職員は、管理職を敵視する傾向がありますが、そんな中で人間関係をうまくつくっていくことを考えるのですけれど、男性でしたら、一ぱいやりながらということになるのでしょうか、女性の私には、出来そうもありませんし、家には口を開いて食事を待つ家族がいると思うとおそくまでつきあうこともできないのです。結局、翔ぶことも、はねることもできない私には、職員に対しても、生徒に対しても、地域の人々に対しても、又仕事をするにしても、誠意を持ってあたること以外にないと思っています。その誠意は、やがて皆に理解され、協力を得るものと信じ、自分なりのいき方をしようと考えております。

管理職の仕事はいろいろですが、どれであっても、男性以上にやらなければならないのが現状です。まだまだ女性にはきびしい社会なので、仕方がないのです。

先日、先輩の女性校長さんより年賀状をいただきましたが、次のようなことが書かれていました。それは、私の校長が私に接し「女性を見直した」といっていたのを聞いてうれしかったという内容でした。

女性が男性の中で肩を並べて同等に仕事をしていくためには、男性の目を開かせるだけの女性自身に力がなくてはならないようです。それは仕事に対するきびしさ、「甘え」のない生き方。そして他人を包容する心の豊かさが求められているのだと思います。家庭と職場の谷間にあって、ゆとりをもって自分自身をとりもどすことのむずかしい、仕事に追われどおしの毎日ですが、心の美しさと知性あふれる心の豊かさを身にそなえた魅力ある人間をめざして日々努力する必要を感じております。幸い大学時代にその素地をつくっていただきましたので、更にその上に自分を築いていくために、その時々々に最善をつくそうとがんばっております。(2回生)

北京・ヨーロッパの旅

金子晶子

7月26日夕刻成田発北京へ向う機中、私は赤く染まり重なり合う雲海に沈んでゆく夕陽を感慨深く見つめていた。いつか参加したいと願っていた海外研修、世界地理研究会の「北京・ヨーロッパ地理視察」23日の旅の出発である。参考にとコースに従い印象を記してみた。

北京、生まれ育った土地への再訪ということで種々な期待を抱いたが、圧巻は万里の長城であった。市の北西、八達嶺で尾根ぞいに左右に烽火台へと高くのびる長城、すりへった石の急勾配を登り烽火台に立つと、広大な荒野から騎馬民族が土煙をたて押し寄せてくる様が目に浮ぶようだ。築城に費した長い年月、夥しい労働、こうした長城の歴史は、騎馬民族の恐れに対する農耕民族の戦いの歴史だったのかと今迄の疑問が突然解けるようだった。また長城、故宮等に見られる歴史と人民公社、少年宮、都市建設に見られる新しい国造りの息吹きの共存する都市でもあった。

青い海、白い大理石の殿堂パルテノンと駆け足のアテネを経て、東と西の接点イスタンブール。初めて目にするイスラムの世界、荘重なコーランの響きやオスマンの壮大なブルーモスクにみるエキゾ

チックな世界、しかし同時に、聖ソフィア寺院のアラビア文字で飾られたドームから建物の翼に曲がり、突然見上げる壁面に大きなキリストのモザイク画を見た時の驚き、千年も続いたビザンチンがそこには息づいていたのだ。ビザンチンとトルコとの歴史の彩の象徴ともいえるだろうか。更にマルマラ海の輝やく紺青に地中海性気候を感じる時、観光船の横をすりぬけるソ連の潜水艦、そこはもう現代史の世界だった。

古きイタリーからシンプロン峠越えで入ったアルプスの山村ツエルマット。山歩きの好きな私にとって旅の最大の期待は本場アルプスと氷河である。朝早く一人草つきを登る。突然朝日を受けたマッターホルンの頂きが目にとびこんで来た。その時の感動、自分の胸の高鳴りが聞こえそうな感じだ。“…アルプスでも世界でもたゞ一つぬきんでた山、この山に比較できる山は存在しないだろう。”とまでウィンパーに称賛されたマッターホルン、すらりとしたピラミッドの頂き、力強い稜線に囲まれた斜面、雄大に大空に突き出している姿はまさに類のない美しさ、神々しさである。天気は快晴、恵まれたアルプス登山の日である。登山鉄道でゴルナグラートへ。正面には最高峰のモンテローザの白い稜線に続き、リスカム、ブライトホルン等 4,000 m をこえるアルプスの連山、幾筋もの氷河と大パノラマが展開する。高所でのデラックスな昼食後元気なグループは 5、60 cm の雪の小径を廻りこみ、じぐざぐに急降下、ゴルナグラート氷河上に立つ。展望台からは黒い縞模様を描いていた氷河も近くではきれいだ。クレヴァスの神秘的な碧氷、エンドモレーン、サイドモレーン、氷河の削こんのついた岩、羊背岩と実に氷河地形のテキストを見るようだ。氷河ぞいの道を西へ進む。行手正面には東を向く巨大なマッターホルン、左手には五色沼の水の色を思わせる池をのせた氷河、足元には競い合う様に咲き乱れる高山植物の群れ、そして時々ゆきかう山男、赤いシャツに短パン、日焼けした長い足をみせマッターホルンを背に歩いてきて挨拶の一声を交して過ぎゆくのは実にすがすがしい。それがドイツ語、フランス語、英語と国際色豊かなのも面白い。ツエルマットに戻り、閉館前の Alpine Museum に直行。ウィンパーのマッターホルン初登頂成功後、下山途中でロープが切れ四人が遭難という劇的な登攀の記録や遺品、アルプスの資料を集めた念願の博物館を訪ねた。カフェテラスで小休止、暮れてゆく中をホテルへ戻る。やはりこの旅のクライマックスであった。

この後、旅はローヌの源流ローヌ氷河を経て西ドイツへ。フランクフルト大の Dr. Fick との地理巡検や西独から東独へ、東ベルリンから西ベルリンへと二回の国境通過、夜半までの話し合いを通し、社会主義国の模様、めざましい復興と尚残る戦争の傷跡、また同じ敗戦国でも国を分割されたことのない我々には測り知れない祖国、“一つの Deutschland” への深い思いにふれられたのは印象的だった。

次いでノルウェーにわたり白夜とフィヨルドを体験。どこまでも透明な空気の氷河湖岸に十時過ぎやっと沈んでゆく太陽、又フェリーの両側にせまる高さ 1,000 m もの垂直な断崖、ここから落ちこんでくる滝に感嘆したソグネフィヨルドのフェリーの旅、東山魁夷が画文集「白夜の旅」でスウェーデンをアダージオ、このフィヨルドをアレグロにたとえていたがまさに圧巻だった。

北欧からは北海油田上をかすめ、運河と干拓、園芸の国オランダを見学後パリに 3 日間、ここでは芸術の都としてのパリと共に、ヴェルサイユのマロニエの木蔭のサイクリング、セーヌ川岸のブキレット（本屋）で見つけたパリの古地図、モンマルトルの夜のシャンソン等、自分の足でちょっぴりフ

ランスの粹も味わい、ヨーロッパを後に香港経由で帰国。

編集者から“子育てしつゝ一人で行けたのは？”との難問を出されたが、ママを出してやろうという家族の理解、三人の子供達の大きな特製夏休みカレンダー、そして自分の決断ということになるのだろう。出かける迄は長く感じた23日、でも地理を学んだ者として、自分の目で見、身体で感じることの大切さを改めて痛感する実り多い旅であった。 (8回生)

青葉城下私誌

鈴木陽子

仙台に移り住んでこの3月で2年になる。生来東京ぐらしの私にとって、初めての地方都市での生活は、何事も東京と比較してしまいがちだが、色々と興味深い。そこで主婦の眼から見た仙台の一面について、感じたことを少し述べてみたい。

周知の通り仙台は伊達62万石の城下町として栄え、明治以降も東京に次ぐ都市として、第二高等学校、第二師団司令部などが早くから設置されて、学都・軍都として発展した。しかしその後日本の工業化の進行につれて、小規模の伝統産業以外工業生産でみるべきものがないまま、市の発展は停滞し、相対的地位は低下した。最近においても、同規模の都市として共に政令指定都市への運動をしてきた札幌・広島などにも取り残され、人口66.5万(1980年国勢調査)ではまだ道はほど遠く、単なる地方中心都市に留まっているといえる。

仙台市の性格を一言で表わせば「支店経済の町」と言える。仙台支店或いは東北支店といった、仙台へ進出している企業の出先機関は約4,000あり、一事業所当りの雇用者数平均が28人という。大ざっぱな計算として、その雇用者1人が平均3人家族としても支店関係人口だけで33万人を越えることになり、市の人口の半数に達してしまう。勿論このなかには仙台周辺の市町村に住む人も多いだろうし、単身赴任者も又相当多いので、だいぶ割引いて考えなければならないが、いかに仙台の町が支店経済に支えられているのかが推察出来よう。従ってそこに働く人間の何割かはいわゆる転勤族ということになる。人口移動の激しさは、春の転勤シーズンの仙台駅頭や市役所住民課の混雑からも伺える。

市の産業別人口構成をみると、7割が第3次産業であり、なかでも不動産業の増加が著しいものなるほどと肯ける。転勤族は大部分中心地に比較的近いマンション、貸家、社宅に住んでいるが、これはかつての武家屋敷が居住人口の割に広がった為に、邸内に貸家を建てたり或いはマンション、社宅に建て変ったりして、流入人口を受け入れているからである。又、支店の本店所在地をみると6割が東京であり、物心共東京指向というか、東京との結びつきが非常に強い。今は日本全国どこの地方都市へ行っても、「東京の名店」は沢山出店しているけれど、ラジオ・テレビの天気予報で東京地方の天気までいうのはびっくりした。

転勤族にとって仙台は非常に住みやすい。仲間が多いし、地元民にしても転勤族が珍しくないから扱いに慣れているというか、容易に受け入れやすい。

東京と比較しても、町はそんなに広くはないし、交通渋滞も東京ほどではないので町の中心商店